

機関番号：13901
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2008～2010
課題番号：20520284
研究課題名(和文)
古代ギリシアにおけるカロス・タナトスの研究
研究課題名(英文)
A Study of *kalos thanatos* in Ancient Greece
研究代表者：
吉武 純夫 (YOSHITAKE SUMIO)
名古屋大学・文学研究科・准教授
研究者番号：70254729

研究成果の概要(和文)：

カロス・タナトスという概念が、テュルタイオスによって規定された意味を基本として保ちながらも、古典期へと時代が下るに従って様々な意味に用いられるようになり、この言葉の深い意味は、特に悲劇においてもっとも活発に探求されたことを明らかにした。そこには古代ギリシア人の死生観、ヒロイズム、倫理観の発展の核心を見ることができる。

研究成果の概要(英文)：

This study has clarified that the concept of *kalos thanatos* kept its principal meaning throughout as Tyrtaeus had originally defined it on the one hand, while it acquired various new meanings towards the classical period on the other. The significance of the concept was most lively explored in the genre of Greek Tragedy, wherein we can observe the essence of the history of the Greek view of life and death, their heroism, and their ethical thought.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学

キーワード：西洋古典学・死生学

1. 研究開始当初の背景

カロス・タナトス(美しい死)とは、7世紀

のテュルタイオスが造語して以来、戦死あるいはそれに準ずるような死を称える言葉と

なったが、なぜ「良き」を表す他の形容詞ではなく、「美しい」という感性的な形容詞によって修飾されたのか、また「美しい死」という表現がギリシア文化において、各時代と各分野においていかなる意味を持って使われたのか、ということは十分に検討されていなかった。わずかになされた議論も、納得のいくものではなかった。Loraux は、スパルタ人が戦死を重んじた歴史を描いていても、戦死がどういう意味でカロスとされたのかは明らかにしていなかった。Vernant は、ホメロスの戦士が戦死するときに発揮される美をカロスと表すとしたが、高度に思弁的で、戦士の若い肉体に内在する美が死によって永遠化されるという以上のことは何も説明していない。Bowra は、いわばソポクレス的英雄像を念頭に置いて、戦死には英雄的な自己実現としての、また義務の完遂としての意味が見出せるとしたが、なぜそれがカロスと形容されるのか、どういう意味でカロスなのかという問題意識は持っていなかった。また、これまで、古代と近代の国家イデオロギーの影響で「国のための死」だから美しいとする見方や、アリストテレスらの影響で「他人のためになされた一切のことは美しいとする見方、あるいは5世紀中頃からの倫理観で「貴族的なものは何でもカロスである」あるいは「好ましいものは何でもカロスである」とする風潮があったため、この表現は「立派な死」のこと全般をあらわすものとして曖昧に使用されたり理解されたりしていた。その結果として、死がカロスと形容された個々の例も、「カロス・タナトスとは戦死のことである」とか、「カロス・タナトスとは倫理的に立派な死のことである」などと紋切り型的に説明されて終わることが多かった。この語が使われている状況やカロスという語の意味の多様性についての考慮が欠けていることが多か

った。

2. 研究の目的

本研究では、テュルタイオスによって規定されたカロス・タナトスという概念が、カロスという語の意味の多様性とどの係わり合いの中で、時代の変遷の中で、どのように命脈を保ち、あるいは揺れ動いたかをとらえて、この概念の歴史をホメロスにおける前史からギリシア古典期の終わりまで実証的にまとめ、一冊の本にすることを目指した。特に、この概念が様々なニュアンスをこめて使われたのはギリシア悲劇においてである。そこには、ギリシア人の死生観とヒロイズムと倫理感覚が最も顕著に現れている。しかし個々の作品がカロス・タナトスの概念を用いて表そうとしたものをもれなく解明することは、これまで誰にも真剣に取り組まなかったことであり、きわめて複雑で高度な論理のおよび文学的考察を必要とする。

3. 研究の方法

留意した点は次の通りである。『1』ギリシア文学の中で「良い死」とされたものの全体像を概観する。カロス以外に死を肯定的に形容した言葉は少ないが、直截な形容をせずとも好ましい死を描いた例は様々にあった。

(2) カロスという語の性質を踏まえて、テュルタイオスのカロス・タナトスという言葉が何を意味したかを精密に解明する。ここで重要なのは、テュルタイオスにおけるカロスの語義を正確に捉えることである。(3) 古典期に至ると、カロスの語の意味が多様化してくることに留意することが肝要である。(4) とくに悲劇のジャンルで、様々のコンテキストの中にカロス・タナトスの概念が持ち出され、従来の意味をふまえて多様なニュアンスをこめて使われたことを跡付ける。それぞ

れの劇作品の全体を見渡しながらか、様々に解しうる該当箇所正しい理解を探求する。(5) 古典期の歴史記述、葬礼演説、哲学議論のさまざまなレベルの思潮も悲劇のカロスタナトスに大きな影響を与えていることに留意する。

4. 研究成果

カロスタナトスという概念の歴史をまとめるものとして計画した本は、次のような各章で構成される。【1】カロスタナトスという枠にとらわれず、ギリシア文学の中で「良い死」とされたものの全体像を概観する、【2】ホメロスの言語という伝統の中で、テュルタイオスがカロスという言葉で死を形容したとき、それは「積極的に戦っている最中に死ぬ兵士の外貌」を形容していたのであり、戦死のそのような外貌に見て取られる何らかの内的な美点を表していたのだということ論証する、【3】古典期においてはカロスという言葉の意味が多様化したことを示し、カロスタナトスという言葉が新しい意味で使われる例も出てきたことを、もろもろのジャンルから指摘する、【4】そして特に、古典期の悲劇の中では、カロスタナトスの概念はテュルタイオスによって規定された意味を基本としながらも、さまざまな状況設定の中での、戦死に限らぬさまざまな種類の死について、時には深刻に、時には皮肉的に、さまざまなニュアンスをこめて応用されていたということを実証する。以上の内容は大半書きあがっており、本はあと一年半後に完成する予定である。各章の特徴は次の通りである。

【1】について。ギリシア文学全般において、死が良きものとしてとらえられたのは、「苦境からの脱出」としてとらえられた場合や、自然死など、大きく8つの項目に分けら

れる。そのうち、3つがカロスタナトスと呼ばれることが多かった。しかしそれらも、ホメロスにおける戦死描写のように、カロスという言葉を使わずに行われたものもある。

【2】について。ホメロスにおいては、カロスの語は、官能(感覚)的にとらえられる対象を形容するときに卓越性を表し、それ以外の対象を形容するときは及第・適合を表す語であった。テュルタイオスが戦死をカロスと形容したのは前者に相当する。あくまでも戦死の外貌に映し出された卓越性を称えたものであって、必ずしも戦死を倫理的側面から称えたものではない。これは2002年および2007年に発表した拙論を発展させた議論である。

【3】について。時代が下るにつれて、カロスという概念の矮小化、内面化、また官能性からの離脱や階級意識化が起こる。それに伴い、満足死・老齢死をよしとする評価にもカロスという言葉が用いられる例が、ヘロドトス等において現れる。また弁論や哲学書において、カロスタナトスが他人のための死を意味したり、殉職を意味したりする例も見られた。ただし、テュルタイオスの規定した意味でこの語を用いるということが依然として基本であり続けたことは、歴史記述のテキストにより照明される。【4】について。悲劇『アンティゴネ』は、主人公が、女でありながら戦死と同然の死に方をカロスと評して自ら目指したが、武器を持たない女であるがゆえに遂げることができないことを描く。そこにはカロスに死ぬ機会が女性に閉ざされていることが描かれている。このことは2002年の拙論を発展させた議論である。エウリピデスの『ヒケティデス』では、戦死した将たちの遺体の光景がカロスだとされるのは、その光景が彼らの立派な戦いぶりを視覚的に彷彿させ、見る者たちの感情を高ぶらせるようなものであることを表している、と観察され

る。それは標準的なカロス・タナトス概念の応用であるといえる。『アイアス』では、狂気に陥って反乱に失敗した主人公は、「高貴な生れの者はカロスに死んでいるべきだ」と述べて自殺する。従来この自殺は自動的にカロス・タナトスであると見做されてきたが、この劇はむしろ、彼の死がそのままでは卓越したものであるどころか、高貴な者に相応しくないものであることを表そうとしていると考えるべきである。彼の死は、オデュッセウスのたすけによって、かろうじて不名誉ではないものとなるのである。『オレステス』において、殺人の廉で死刑判決を受けた主人公たちは、相異なる二つの行動目標によって行動を起こす。一つはカロスに死ぬこと、もう一つはなんとしてでも助かることである。それはすなわち、命を惜しまず何事かに身を捧げたいということと、メネラオスに復讐せずに死ぬ気はないということである。二つの不調和な原理に従っているうちに、彼らはヘレネの誅殺という公益・大義の名の下で死ぬ機会を逸して、不当な復讐行為に進むほかなくなっていくことになる。ここでは、「命懸けの行動」という要素も盛り込まれているから、従来のカロス・タナトス概念に合致するものの、最初のうち彼らが何をもってカロス・タナトスを主張しているのか分らないという状態が続く。このことは実は、ただ的に損害を与えて自殺するというような安直な死でもカロスだと言い張ることができるということを表している。それは、カロス・タナトスという語の信頼性が低められているということでもある。

以上のように、カロス・タナトスという概念は、テュルタイオスによって規定された意味を基本として保ちながらも、古典期へと時代が下るに従って様々な意味に用いられるようになった。そこには古代ギリシア人の死

生観、ヒロイズム、倫理観の発展・動揺の核心を見ることが出来る。この言葉の深い意味は、特に悲劇においてもっとも活発に探求され、多くの劇的状況を生み出すために活用された。以上のことがこの研究により解明された。この概念についての集中的研究は、過去において Vernant と Loraux の数本しかないもので、国内外を問わず、この研究のもたらす貢献はきわめて大きいものと言えるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2件)

① 吉武純夫、「エー・カロス・テツネーケナイ：Aias の悲劇的課題」、『名古屋大学文学部研究論集(文学)』、査読なし、57 巻、2011 年、27-45 頁。

② 吉武純夫、「カロン・テアマ：運ばれてきた将たちの遺体 (Eur. Supp. 783)」、『西洋古典論集(京都大学西洋古典研究会)』、査読あり、22 号、2010 年、143-62 ページ。

[学会発表] (計 1件)

① 吉武純夫、「オレステスたちの目算とカロン」、京都大学西洋古典研究会 (2011 年 4 月 23 日、京都大学)

[図書] (計 1件)

① Sumio Yoshitake (共著), Cambridge University Press, *War, Democracy and Culture in Classical Athens*, ed. D. M. Pritchard (2010), 359-377 (総ページ 460) .

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉武 純夫 (YOSHITAKE SUMIO)
名古屋大学・文学研究科・准教授
研究者番号：70254729

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし